ラストライブの夜の奇跡

赤松青海

人　物

朽木竜人（たつと）（２７）元バンドマン
世古慎太郎（３０）会社員
マリ（２４）朽木のバンド仲間
持田朔（２５）朽木のバンド仲間
ファン１・２（１０代女性）
店長
ＰＡ（音響エンジニア）

○新宿セントラルロード・ドンキ前

遠くにゴジラが見える通り。

目隠れパーマの持田朔（２５）、黄色い袋をさげて出る。

ＬＩＮＥで「マリ」に「衣装買った」と打つと、即既読がついて「でかした！タツさんは任せて！」の返事。

持田「お前はタツさんのなんだよ」

「とりあえず任せた」と返信。

ファン１「え？！モッチさん？！」

ファン１・２（１０代女性）が持田にかけよる。

ファン１「ゆら魂のファンです！」

ファン２「写真撮ってくれませんか！」

持田「……俺ドラムだよ？陰薄いよ？」

ファン１「関係ないです！目隠れだし！」

持田「じゃあ最推しは？」

ファン１「マリさんです」

ファン２「タツさんです」

持田「ダメじゃん。聞いて損した」

世古の声「あの～」

スーツ姿の世古慎太郎（３０）、持田、ファン二人の会話に割って入る。

世古「今ゆら魂の話してました？」

○新宿三丁目・古着屋ジャングル・外観

迷彩の『古着屋ジャングル』の看板。

○同・同・店内

狭い店内に大量の古着が陳列。

ギターケースを背負うマリ（２４）、古着を色々物色。

ギターケースを背負う朽木竜人（たつと）（２７）、店長に紙袋を渡す。

朽木「要らないの処分したい」

店長「多過ぎ。ウチはゴミ回収業者か」

紙袋から大量の古着を出す。

マリ、朽木の背中に黒いＶネックＴシャツを当てる。

マリ「タツさんこれ似合いそう」

「働いたら負け」と印字されている。
朽木「今日は買わねーよ。てかダッサ」
マリ「バンドマンはVネックでしょ。あとベーシストの「働いたら負け」は名刺―」
マリ、服の山の中に「ゆらゆら魂」と書かれたTシャツをみて動揺する。
店長、マリの様子を見て、「ゆらゆら魂」Tシャツを朽木に返す。
店長「……これは無理。プライスレス」
朽木「ただのTシャツだろ」
店長「「ゆらゆら魂」タツのTシャツだろ」
店長の背後のマリと朽木、持田が映る
『ゆらゆら魂』ポスターを指さす。
店長「……いつ東京でるつもりだ」
朽木「……明日には」
店長「ゆら魂はどうなんの」
マリ「私とモッチは続ける。店長も来て、今夜のタツさんのラストライブ（仮）」
朽木「仮じゃねぇよ」
店長「……おう。見積もり出たら連絡する」

○セントラルロード・トーホー前（夜）
トーホーの奥にゴジラが見える。
朽木・マリ、人集りを除けながらトーホー方面を進んでいく。
キャッチが声をかけてくるが無視。
朽木「いつもやかましいな、この街は」
マリ「新宿だしね」
朽木「改めてみるとデケぇな、ゴジラ」
マリ「新宿だし」
朽木「……デカいしやかましすぎ。全部」
朽木、涙を堪えるように唇を噛む。
路上ライブの歌声が聞こえる。
マリ「ちょっと寄ろうよ。時間あるし」

○シネシティ広場
スマホで動画を撮りながら歌う路上シンガー。
立ち止まって聞く人は少ない。
マリ「上手いけどね」
朽木「個性ないな。耳に残らない」

マリ「……私らも少しは大きくなったよ。メジャーデビューはまだだけど、ライブは常連さんもいるし、新宿では有名な方」
朽木「何が言いたい？」
マリ「やめるのやめろ」
朽木「……無理」
マリ「何で！」
マリ、周囲の人からの視線に俯く。
朽木のスマホからバンド音楽の着信。
朽木「店長からだ。いくぞ」

○新宿フォルト・外観（夜）
『ゆらゆら魂タツ　ラストライブ』のプレート。

○同・控え室
長椅子が机を挟んで二つの狭い部屋。
朽木、入室して着席すると、ラックの白装束と三角巾、喪服２着に気づく。
持田「おはよー、タツさん」

対面の持田、スマホを弄っている。
朽木「俺いじめられてんの？」
持田「違いますよ。ロックな演出っす」
マリ、入室して持田の膝を枕にふて寝する。
持田「……何が任せろだよ」
朽木「なんか、辞めるなって聞かなくて」
持田「実際タツさん、音楽やめて何すんの」
朽木「……さぁ、何すんだろ」
マリ「ならバンドやめなくていいじゃん！」
マリ、むくっと起き上がる。
マリ「私わかんない！確かに稼げてはない！けど楽しい！タツさんは違うの？！」
世古の声「楽しいだけが全てじゃない」
世古、控え室の入口前に現れる。
朽木「慎太郎さん……！なんで……？」
マリ「……誰？」
持田「タツさんの元バンド仲間らしい」
世古、朽木の隣に座り、朽木は居心地悪そうに距離をとる。

世古「マジ大変だぞー社会人。早起きして満員電車乗って、あちこち回って、帰ったら家族サービス。気づいたら寝る時間」

マリ「なら―！」

世古「でもそれが普通。好き勝手生きてたらどっかでしわよせがくるんよな。マリちゃんさ、いくつか聞いていい？」

マリ「……２４」

世古「２４と２７じゃ見える景色は違う。独創性は錆び付いて曲が書けない。なのに自分より若いバンドがテレビに出て、才能を見せつけてくる。でも書けないもんは書けない。で、悔しさもいつかは諦めに―」

朽木「うるせぇ！二人の前で言うな！」

場が白ける中、ＰＡが入室。

ＰＡ「リハの準備できましたけど……」

誰も動き出せない中、マリが立ち上がり、スタスタと退出していく。

○ライブステージ

持田、軽くドラムで８ビートを刻む。
マリ、目を閉じ、指でリズムをとる。
朽木がベースの弦を張り替えている
と、世古が代わりの弦を差し出す。
世古「さっきは悪かった。萎える事いって」
朽木「……大丈夫でしょ。多分二人は」
世古「実際モッチはドラムとしてプロ並みだ
と思う。土台の安定感が違う。しかも目隠
れだし」
朽木「目隠れは関係ないだろ」
ＰＡ、両腕で大きな丸を作る。
ＰＡ「ＯＫでーす」
持田「あざした」
ＰＡ「次マイクテスト、お願いしまーす」
マリ、無言でステージに上がる。
深呼吸の後、感情の乗った声で東京事
変の『群青日和』の冒頭を歌唱。
ＰＡ、思わず笑みがこぼれる。
世古「魂、こもってるな」
朽木「……バンド名の由来だしな」

世古「面白い。人の曲を自分の物にしてる」
朽木、無言でベースのペグを回して、
チューニング。
世古「二人といて新宿の有名人止まりなの、
自分のせいだと思ってるだろ。違うぞ」
不安定な音がベースから鳴る。
世古「見つけてもらえなかっただけだ」
朽木「……気休めはいいよ」
世古「……待たせてすまなかったな」
世古、朽木に名刺を渡す。
『プラズマミュージック　世古慎太郎』と書かれている。
朽木、驚きの表情で世古を見返す。
PA「マリさんありがとうございまーす！」
マリ、朽木に駆け寄り、名刺を見る。
マリ「タツさんそれ……！」
世古「改めて、プラズマミュージックの世古です。あなたの実力を見せて下さい」
朽木、頬をパンと叩き、ステージへ。
×　×　×

ステージ上に喪服姿のマリ・持田、白装束に白三角巾を頭につけた朽木。
マリはギター、朽木はベースを持ち、持田はドラムを前に座る。
観客の中にファン1・2、店長、世古がいる。

マリ「えー皆さん。今日はタツのラストライブ（仮）に来てくれてありがと。見ての通り、喪中です。あれ、お化けです」

朽木、挨拶代わりに低音を鳴らす。

マリ「で、あのお化けから重大発表！」

朽木、白装束をはだけさせる。

「働いたら負け」のTシャツ。

朽木「タツ、脱退撤回！ゆら魂、プラズマミュージックでメジャーデビュー決定！」

観客から歓声と拍手が上がる。

マリ「奇跡みたいな縁でここまで来ました！これからもゆら魂をよろしく！一曲目は、マイホーム新宿に感謝を！……群青日和」

朽木、マリ、持田、演奏を始める。

赤松　青海